

云ひ捨て、置いて、袖からつき込んだ左手でぐつと腹を押へながら、わざとゆつくり構へ込んだ。金入を懐にし、煙草を袂に入れ、外套を着込み、帽子を被つて、外に出た。寒い夜だつた。西の空に傾いてる月の面を掠めて、白い雲が空低くちぎれ飛んでゐた。彼は明るい大通の方へ歩いていつた。風を捲き起して轟然と走り過ぎる電車の響と、何處までも續いてるレールの蒼白い輝きとが、夜更けの寒い街路に快かつた。彼は眞直ぐにそのレールに沿つて歩み續けた。何もかも打忘れて大地の上に一人つゝ立つてる氣持だつた。提燈をつけ大きな荷物を積んで通り過ぎた怪しい荷車が、その氣持にぼつりと黒い影を落していつた。

下らないことにこだはる必要はない！

それでも、寂しい町並に、一軒の閉め残つた硝子器具店が、ざら／＼した光りの亂射を投じてるのを見た時、彼はその中に石を投り込んでやりたくなつた。石を拾ふために屈まうとまでした。が、俄に馬鹿々々しくなつた。彼はほつと大きく息をした。

やがて歩き疲れると、眼に止つた相當のカフェーへはいつた。五六人の客が居た。その方へ背中を向けて、ウイスキーやカクテルの杯をうぶり／＼と嘗めた。燐爐の火がいやにかつと熱くて、そのくせ身體は温まらなかつた。彼は強ひて杯の數を重ねた。腹も空いてゐた。料理を三四品食べた。

電車が無くなつた頃、彼はぼんやりした酔心地で家に歸つて來た。寄せられてる玄關の戸を押し開いたが、誰も出て來なかつた。自分で締りをして、茶の間に通つた。火鉢に鐵瓶の湯が沸いてゐて、茶道具が揃へてあつた。茶をいれて飲んだ。

家中がひっそりしてゐた。鼠の音もせず、人の氣配もしなかつた。彼は變な氣持になつた。女中部屋を覗いてみると、女中はぐつすり眠つてゐた。座敷の方を見ると……喫驚した。

龍子が、順一の枕頭に、石のやうに固くなつて端坐してゐた。

順一の病氣がひどいのかしら、それとも……。

一三時間前のことが、眼にはつきり見えて來た。それを無理に彼は突きぬけようとした。つか／＼とはいつて行つて、順一の横に坐つた。手を伸して額に觸つてみたが、生たま温あたたいだけで、熱はなささうだつた。

「様子が悪さうなのかい。」

「いゝえ。」と龍子は顔を伏せたまま答へた。

「どうしたんだい。」

返辭がなつた。彼は暫く待つてから、火鉢の方へいざり寄つて煙草を吸つた。

「旦那様は、」と龍子は云つた。「お坊ちやまが可愛くないのでございませうか。」

何のことだかよく分らないで、その方を見返すと、龍子の眞剣な眼付に打たれた。彼はぎくりとした。

「私奥様から、坊やのことを頼むとくれぐれも云はれてをりますし、それに、自分の兒は他人にやつてしまつて、お坊ちやまが何だか自分の兒のやうな氣がして、可愛ゆくてお可哀さうで、離れられませんかけれど、いろ／＼考へますと、やはりお暇を頂いた方が宜しいやうでございますから……。」

ゆつくりした言葉であつたが、その調子が上ずつてゐて、いつもの彼女ではなかつた。

彼はちつとその顔を見つめてやつた。彼女は口を噤んだ。

「嘘だ。」と彼は叫んだ。「お前は僕に意見をするつもりなんだらう。」

彼女は顔色を變へた。

「何を仰言いますの。」

「さうだ、僕に殴られたのが口惜しいんだらう。」

「いゝえ。」きつぱり答へておいて、それから俄に彼女は身を震はした。「恐いんでございませう。恐くつて……恐くつて……。」

彼は息をつめた。ぞつとした。障子の硝子に映つてゐる電燈の影を見つめると、眼の中が熱くなつてきた。涙が眼瞼を溢れた。それに自ら氣付くと、涙が後から／＼湧いてきた。「許してくれ、僕が悪いんだ。」

彼は龍子の手を執つた。がつしりした太い手だつた。それが力強かつた。彼女の方へ身を寄せると、彼女の方も進んできた。退しいすつしりとした彼女の腕の中に、彼は我を忘れてもぐり込んでいつた。

「旦那様！」

口元の肉を引きつらして、泣いてるのか笑つてるのか分らない皺を刻みながら、眼の奥で微笑んでゐた。

底のない泥沼に陥つたのと同じだつた。彼は跳けば跳くほど、その勢に驅られて没して

いつた。しまひには、自ら進んで絶望的に没していつた。

翌朝、彼は離れの押入の中に、秋子の遺骨が出しつ放しになつてゐるのを見出した時、冷たい脂汗が額ににじんだ。

それが夜になると、怪しい幻覺の形を取つてきた。

龍子の前を逃げるやうにして、離れの室にやつて來、窓の下に据ゑてる机に向うと、丁度後ろが押入になつてゐた。それがしきりに氣にかゝつた。いくら努力してもいつのまにかそちらへ注意を惹かれてゐた。音もしないですうつと襖が開いて、白い布がはらりと解け、白木の箱や骨壺がまさしくと見えてきた。何か大きな力でねぢ向けられるかのやうに、首を徐々に振り向けてみると、押入の襖は閉まつてゐた。下半分がたゞ白くて、上半分に電燈の笠の影を薄暗く受けてゐた。

彼は怪しい衝動に驅られた。立ち上つて押入へ歩み寄り、骨壺を開いて、中の白いやつを齒でかじつた。食鹽と灰とを混ぜて嚙むやうな味だつた。不氣味な戦<sup>ぶ</sup>きが背筋を走つた。慌てゝ室の中を見廻した。誰も居ないのを見定めて骨壺をしまつた。

また暫くすると、彼は同じ衝動に驅られた。立ち上つて押入へ歩み寄つた。總毛立つた顔をして眼を見据ゑてるのが、我ながら不氣味に意識された。一寸立ち止ると、ぞつと凍んだ。

彼は堪らなくなつて室から飛び出した。廊下の曲り角が陰々として薄暗かつた。血の氣を失つた顔で龍子の前に現はれた。

それを龍子は待ち受けてゐた。

たゞ母性のみが持つてゐる大きな抱擁力だつた。子供をも大人をも本能的に抱き込む、鳥<sup>トリ</sup>のやうな粘り氣のある力だつた。彼はほつと息をついた。

然し間もなく、忌はしい反撥の氣がむら／＼と彼の心に湧いた。彼は彼女を押しつけて立ち上つた。

眼に險を帯び、口元から頬へ皮肉な色を漂はせて、そのどつしりとした身體全體で、彼女は彼の方をぢろりと見やつた。

あなたは後悔してゐらつしやいますね！

然し口ではさう云はなかつた。

「どうなさいましたの？」

彼は何とも答へないで、室の中をのつそり——と意識した歩調で歩き廻つた。

「坊ちやまが……。」

彼女が聲を低めてるのが可笑しかつた。眼を覺したつて構ふものかといふ氣がした。わざとその枕頭を力足で歩いてやつた。

順一は眼を覺して泣き出した。龍子は慌てゝ乳を含ました。

「むりに寝かしつけようとはかりしないで、少し抱いておやりよ。」

彼女は黙つて、順一が眠るまで待つた。それから彼の方へ向き直つてきた。

「私を憎んでゐらつしやるんでせう。それなら、私出て行きます。」

「出て行けと誰が云つた！」

理不盡な言葉を浴せかけてやつたが、彼女は反抗して來なかつた。下を向いたまゝ、髪の毛一筋揺がさないで、ちつと坐つてゐた。

鎗で突いても突き通せない、ぢいわりとした而も深い根を張つた、重々しい容積といふ感じだつた。彼が其處を立去つても、もう見向きもしなかつた。

彼は一人で苛ら立つた。

夜遅く眼を覺すやうな時には、心が冷たく憎えきつて、何となくあたりが見廻された。

誰も居なかつた。八疊の室ががらんとしてゐて、孤獨な自分の姿をぼつりと浮び上らせた。

彼はなほ室の隅々まで見渡した。誰か隠れてゐるかも知れないといふ氣がした。

その誰かど、無意識に探し求めてゐる誰かど、實は秋子であることに氣付くと、彼は堪らない氣持になつた。

秋子、秋子！

障子の硝子に映つてる彼の影を見て、二つになつてはいや、と云つた彼女のことが、はつきり思ひ出された。

彼は布團から匍ひ出して、半身で伸び上つてみた。後ろに電燈の光を受けた眞黒な影が、障子の腰硝子に薄すらと映つてゐた。瞳を凝らすと、それが次第に濃くなつてきた。硝子のすぐ向うまで寄つて來て、今にも室の中に飛び込んで來さうだつた。

妙だぞ、と思ふと同時に、彼はにぢり寄つてる自分自身が恐ろしくなつて、つと身を引いた。拭ふがやうに凡てが消えて、雨戸の白い板が向うを限つてゐた。

かすかな……音とも云へない音が、何處からか響いてきた。彼は耳を傾けた。釘を打つ

音、伏金の音、火葬窯の屏の音……でもなければ、分曉の唸り、瀕死の唸り、でもなかつた。何だか滅入るやうな、焼かれた骨が灰になつてゆくやうな……氣配だつた。自然と押入の方が顧みられた。ぞつと身震ひがした。

ふら／＼と立ち上つて廊下に出た。黒い影が掠め過ぎた。彼は顔色を變へた。不吉だ！といふ氣がした。向うの室にはいつてみると、順一と龍子とが床を並べて寝てゐた。秋子が分曉した時の通りの位置だつた。

さういふことが幾度もあつた。

龍子もいつしか、彼の様子に氣付いてゐた。

「屹度あの骨壺がいけないんですよ。お葬式まで寺へお預けなさいましては？」

彼は取合はなかつた。

「私もう嫌でございます。恐くつて……戸を閉めにもはいられません。あんな所へ骨壺をお置きなすつて、どうなさるおつもりなんでせう？」

終りを獨語の調子で呟いて、何かを見つめるやうな眼付をしてゐた。

しと／＼と雨が降つて、今にも雪になりさうな宵だつた。

「ぢやあどうしろと云ふんだ？」

彼は突き放すつもりで、聲の調子を尖らせた。彼女はひるまなかつた。

「御自分でなさるのがお嫌でしたら、私が何處かへ片付けます。」

彼は怒鳴りつけようとしたが、彼女の様子がいつになく眞剣だつた。まともにぢつと彼の眼の中を覗き込んできた。

「俺がするよ。」と彼は叫んだ。

龍子の勝手にさせてなるものか！

彼は或る懸念に囚へられた。離れの室へ走つて行つて、押入を開いてみた。骨壺はちやんと元の位置に在つた。彼はそれを両手に抱へて、室の中をうろついた。本箱が眼に止つた。小さい方の箱の書物を投り出して、その後へ骨壺をしまつた。がちりと錠を下した。その音が胸に響いた。ぢつと眺めてるまに思ひついて、白紙を蓋の硝子一面に張りつけた。清らかな明るみへ出たといふ感じがした。嬉しかつた。

彼は錠を指先でくる／＼廻しながら、龍子の所へ行つた。

「おい骨壺をしまつたよ。」

「え、何處に？」

「本箱の中に……。硝子に紙をはりつけたら、非常に清らかな感じがするやうになつた。」  
彼女は薄い唇を尖らせ、眼の光を二三度ちら／＼さした。それから上目がちに眼を見据ゑて唇を嚙んだ。

「そんなに大切になさるのでしたら、毎晩抱いてお寝みになすつた方がお宜しいでせう。」  
彼は赫となつた。が、心の底から別の感情が、彼女の言葉に暗示された忌はしい感情が、熱を持つて浮び上つてきた。噁り泣きとも憤りともつかないのが、喉元にこみ上げてきた。

それが彼女にも反射した。彼女はいきなり片膝を立て、彼の方へにぢり寄つてきた。  
「私の身體をどうして下さいます？」

敵意の籠つた抱擁のうち、彼は身を投げ出した。

今に見ろ、今に見ろ！

眼をつぶりながら、震へてゐた。

## 六

三月の半ばに、順造は龍子の妊娠を知つた。

彼女は頭が重く痛いと言つて、ぶら／＼してゐた。食慾が非常に減じた。總毛立つた蒼い顔色をして、何をやり出してもすぐに放り出し、眉根をしかめて黙り込んでゐた。朝は遅くまで寝て、晩は早く床にはいつた。うつとり夢みるやうに考へ込んでるかと思ふと、急に眉根をしかめて苛ら立つた。白粉の匂ひを嫌がつて、蒼脹れのした穢い素顔のままであつた。そして或る朝、食後間もなく、食べた物を皆吐いてしまつた。順造は漠然とした不安を覺えた。腹膜炎！ さういふ考へが眞先に浮んだ。醫者に診せてごらんと切りに勧めた。然し彼女はそれに従はなかつた。診て貰つても無駄だと頑張つた。二度目に食物を吐いた時、順造は叱りつけた。醫者の家へ行かなければ、僕が醫者を呼んで来てやる、とまゝで云つた。

「病氣ではございません。」と彼女は答へた。

「ではどうしたんだい。」

彼女は暫く考へてゐたが、低い聲で云つた。

「悪阻のやうな氣がします。」

「え、悪阻！」

順造は飛び上らんばかりに驚いた。

「本當かい？」

「え、屹度さうに違ひありませんわ。」

眼を一つ所に定めて、心で胎内を見守つてる様子だつた。

順造は初めの驚きが鎮まると、心がどしんと落着く所へ落着いた気がした。彼女から顔を見つめられると、冷かな調子で云つた。

「ちやあ身體を大事にしなけりやいけないよ。」

ふいに暗室の中に飛び込んで、暫くつゝ立つてるうちに、闇黒に眼が馴れてきて、ぼんやり物の影が見えてくる、その心地に似てゐた。

運命！ とでも云へるものが、頭の上にぢかに感ぜられた。過去の全景が、影繪のやうに浮出してきた。秋子の儚い運命が、茫と燐光を放つてゐた。順一の……。

星が光つてる！

あの時の感じが、胸の中に甦つてきた。それを如何に長く忘れてゐたことだらう！

順一はまる／＼肥つてゐた。瞳の光が澄んでゐて、目玉の動きの遅い所が、秋子によく似てるやうだつた。鼻筋が通つて唇が心持ち歪んでゐた。笑ふ時左の頬に可愛い笑窪が出来る。ちよつ／＼と舌を鳴らしてみせると、につこり笑つた。何かに見とれながら、うぐん／＼と譯の分らない聲を立てた。いつのまにか赤味が取れて眞白な色になり、房々としたしなやかな黒い毛が、額に垂れて先を少し縮らしてゐた。圓つこい凸額だつた。

何を考へてるのかしら？

餘りに頼り無い小ぢやな存在だつたのが、いつしかしつかり根を下して、自分の運命を荷はうとしてゐた。その存在と運命とが——以前別々なものとなつて順造の眼に映つたのが——一つに結び合されてるのを見て、彼は突然云ひ知れぬ愛着を感じ出した。

胸に抱き取つて、いつまでも庭を歩いてやつた。和やかな初春の外光が、その瞳にちらちら映つてゐた。まぶしさうな澁め顔をしてゐるのが、たまらなく可愛かつた。

さういふ彼の様子を、龍子は不思議さうに眺めた。

「どうしてさう急に可愛くおなりなすつたのでせうね？」

その眼は皮肉な色に鋭く輝いてゐた。

お前が妊娠したせぬだ！ と彼は心の中で叫んだ。理窟ではなかつた。ちかにさう感ぜられた。

彼は出来るだけ順一の側についてゐた。他の座敷に居る時順一の泣聲が聞えると、すぐ飛んで行つた。なぜ泣かせるんだ、と龍子を叱つた。順一が顔を澁めてると、おしつこだ、櫻襟（おひつ）を取代へてやれ、と龍子へ云ひつけた。一日置きには風呂を沸かさせて、自分で入れてやつた。

恐ろしい闘ひが來さうな氣がした。

然し彼は、つとめて龍子へ滋養分を取らせた。毎日牛乳を二合は是非とも飲ませた。力のいる仕事は皆女中にやらせた。

何のためか、彼は自分でも分らなかつた。

二人で差向つてゐると、彼は知らず識らず龍子の腹部に眼をつけてゐた。

「まだ大きくなりはしませんですよ。」

彼女は笑つた。がその笑ひは、途中でびたりと止んだ。

「なぜそんなにお腹（なか）ばかり氣にしてゐらつしやいますの。」

「お前は恐ろしくはないのか。」

「え？ なにか？」

何がだか、彼にもはつきりとは分らなかつたが、大きく膨れ上つた腹の幻が、それは妊娠の腹でも腹膜炎の腹でもなく、たゞ怪しく張り切つてる太鼓腹が、頭の底に浮び上つてきた。

「大丈夫でございますよ。」

龍子はやゝあつて平然と答へた。そして太い臂を少し横坐りにどつしりと構へて、力一杯に押しても小搖ぎだにしさうになかつた。

勝手にするがいゝや！

一人で、何物かに無性にぶつかつてゆきたい氣持で、順造は家の中をあちらこちら歩き廻つた。その歩みの拍子につれて、いろんな考へがひよいひよいと浮んできた。——俺は一體龍子をどうしようといふのか、俺の子を腹に宿してる龍子を。結婚しようといふのか、別れようといふのか、このまゝの關係を續けてゆかうといふのか。俺は龍子を愛してるのか。それとも憎んでるのか。……然し俺のうちには、何等のはつきりした意志も感情もな



い。凡てが腐爛しきつた泥濘だ。その泥濘の中で、俺が本當に愛してるのは秋子一人だ。  
あゝ秋子、秋子！

亡き秋子に對して、龍子は一體何ものなのか。そして、秋子と俺との只一人の子の順一に對して、龍子の腹の中に宿つてゐるものは、一體何ものなのか。……いや何ものだらうと構やしない。今に、今に……。さうだ、腹がむくむくと脹れて上つてきて、セルロイドの人形の腹のやうに張りきつて、叩いたらぼこんぼこんと音を立て、どうにも始末におへなくなつて……。

あゝ秋子！ お前は……。

「どうなさいましたの？」

薄い反り返つた唇をぼかんと開いて、龍子は一心に彼の方を見つめてゐた。彼はそれをちつと見返してやつた。

「眞蒼なお顔をして……。」

云ひさして彼女は俄に口を噤んだ。目玉の表面にきらきらした輝きが浮んで、顔全體からすつと血の氣が引いていつた。五秒……七秒……石のやうな沈黙が続いた。と彼女はふ

いにはらはらと涙をこぼしながら、それを自分でも知らないらしく、彼を見つめたまゝ口走つた。

「あなたは、私を憎んでゐらつしやるのでせう。私を……私のお腹の子を憎んでゐらつしやるのでせう。そして、今のうちに、その子をどうにかしてしまひたがつてゐらつしやるのでせう。」

「え、今のうちにお腹の子を……。」

「えゝ、さうですわ、さうですわ。口に出して云へないものだから、いろんな様子で私に悟らせようとなすつてゐらつしやるのです。私に骨の折れる仕事をさせなかつたり、うまい物を食べさせたりなすつてゐるのも、本當の氣持からぢやなくつて、みんな皮肉に私をいぢめるおつもりなんです。そして表面だけやさしくしながら、心のうちでは恐ろしい事を、口に云へないやうな恐ろしいことを、一人でたくらんでは私にそれを押しつけようとなすつてゐるのです。私がいくら馬鹿だからつて、それくらゐのことは分ります。でも私、いやです、いやです。そればかりはどうしても……。」

兩袖で腹をかこつて、彼女はもう本當に泣きじやくりをしてゐた。

「何を云ふんだ、お前は！ そんなことを頭に浮べるのさへだつて、恐ろしいとは思はないのか。」

だが、俺はそんなことを考へたことが果してなかつたのかしら？ 今度ばかりでなしに、順一が生れる前だつて……。

瞬間に閃めいたその考へに、順造は自ら喫驚して飛び上つた。ちつとしてゐられなかつた。離れの室に逃げ込んでゆくと、白紙を張つて秋子の骨壺を隠した本箱が、妙に白々しく取澄して見えた。彼はほつと安堵した氣持になると共に、呆けたやうに頭が茫としてしまつた。室の真中に敷いてあつた布團の上に、ごろりと長く寝そべつた。

静かな晩だつた。變に物音一つ聞えなかつた。長い間たつた。室の入口から眞白な圓いものが覗き込んで、暫くしてそのまゝすゝと消えていつた。何だつたらう、とそんなことを彼はぼんやり考へた。

いつのまにかうとうととして、薄ら寒さにはつと我に返つた時、眠りながら考へてゐたらしい一つのことを、彼の頭にこびりついてゐた。

どんなことがあつても、順一だけは立派に護り育てゝやらう！

今のうちに腹の中の子をどうにかするとかしないとか、そんな問題らしかつた。順造は怪しい心地で起き上つた。もう夜中過ぎのしんとした静けさだつた。その静けさに耳を澄してると、譯の分らぬ不吉な不安さが寄せてきた。彼は立上つて向うの室を覗きにいつた。

廊下に足音を立てないやうにして、それから注意して障子を開いて、頭だけ差出して眺めてみると、覆ひのしてある電燈の薄暗い光の中に、ぱつとした派手な友禪模様のメリンスの布團に、龍子と順一とがぬくぬくと眠つてゐた。順造はそれを暫く眺めてゐたが、やがてまた足音をぬすんで自分の室に戻つていつた。そしてちつと腕を組んで坐つた。

俺は一體どうしようといふのか。何を求めてゐたのか。

昔からのことが、順一が秋子の腹に宿つてからのことが、影繪のやうな静けさで、彼の頭に映つてきた。

そしてその夜順造は、二度も三度も龍子と順一との寝顔を覗きに行つた。肉の豊かな頬邊をぐつたりと枕につけ、大きな束髪の後れ毛をねつとりと頸筋に絡まして、横向きに片腕を長く差伸してる龍子の懷に、順一はその腕を枕に、仰向きになつて、両手を肩のあたりにかついで、無心に眠り續けてゐた。二人とも殆んど息をしてないかのやうに、安らか

にぐつすり眠つてゐた。順造はそつと寄つていつて、順一の圓つこい凸額トビに一寸手をやつてみた。ふうわりした温かさがあつた。彼が手を引込めるとたんに、何を感じてか左の頬に軽く笑窪をよせて、口を少し動かしかけたが、そのまゝまた静かに眠つてしまつた。死のやうに静かな、而も温い眠りだつた。

何といふ静かな眠りだらう！　そして此處にも……。

順造は悪夢からでも醒めたやうな心地になつて、自分でも喫驚して、本箱の鍵を開いて、中から秋子の骨壺を取出して胸に抱いた。室全體が、心の中全體が、冷やりとしてしいんとなつた。

秋子よ、安らかに眠つてくれ！　順一も、龍子の腹の子も、皆安らかに眠つてくれ！

戸の隙間から白々とした夜明の微光がさし初めた頃、順造はそつと雨戸をくつて外に出た。露を含んだ爽かな夜明けだつた。庭の木々に小さな芽が出かゝつてゐた。片隅の枸杞クコの枝に、小さな實が所々残つてゐて、赤く艶々と光つてゐた。あの朝は、順一が生れた時は、薄紫の花が咲いてゐたつけ。

さうだ、皆安らかに眠つてくれ！

まだ星が一つ二つ輝き残つてゐるらしい仄かな夜明けの光の中に、順造は怪しい心亂れがして、室の中に戻つていつた。そして頭から布團を被つて、眠れ眠れ！　と幻にでも呼びかけるやうに、胸の底でしつゝこく繰返しながら、いつしかうとうとと眠つていつて、それから昏々と眠り續けた。龍子が順一を抱いて彼の室を覗きに來て、次には彼を揺り起さうとしたが、彼は夢中にその手を拂ひのけて、精根つきた者のやうに、いつまでも眠り續けた。

午後になつて順造は眼を覺した。起き上るとすぐに順一の所へ驅けていつた。縁側に坐つてぼんやり考へ耽つてる龍子の膝から、いきなり順一を抱き取つて、室の中をよいよいして歩いた。きよとんとした真黒な眼が彼の心に喰ひ込んできた。

「龍子、お前もいゝ子を産むんだぞ。」

ぎくりとしたやうに肩を震はして、龍子は彼の方を見つめた。蒼白い顔をして、息をつめて、蝦蟇のやうにどつしりとした容積だつた。

「いゝ子を産むんだ！」

獨語の調子で繰返しておいて、順造ははゝゝ……と呆けた笑ひを洩らした。眼から涙が

出て来た。そして自分で自分が分らないばかりとした氣持になつて、順一を抱きながら、  
あちらこちら歩き廻つた。

—了—



◀記手の男るあ▶

大正十三年八月廿七日印刷  
大正十三年九月十二日發行

(定價八拾錢)

著者

豊島 與志雄

發行者

佐藤 義亮

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込  
八〇〇〇  
九八七六

巻四二七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊一



とこて

とこて  
一九四

里見 蓐氏著 (全二冊)  
■長篇小説 多情佛心  
價各貳圓五拾錢、送料各拾貳錢

久米 正雄氏著  
■長篇小説 嘆きの市  
價貳圓五拾錢、送料拾貳錢

江馬 修氏著  
■長篇小説 極光(全三冊)  
上 貳圓五拾錢、送料拾貳錢  
下 參圓五拾錢、送料拾貳錢

岡田 三郎氏著  
■長篇小説 巴里  
價壹圓五拾錢、送料拾錢

加藤 武雄氏著  
■長篇小説 東京の顔  
價貳圓八拾錢、送料拾貳錢

芥川 龍之介氏著  
■創作集 黃雀風  
價貳圓參拾錢、送料拾貳錢

武者 小路實篤氏著  
■創作集 桃源にて  
價貳圓、送料拾錢

佐藤 春夫氏著  
■創作集 美人  
價壹圓五拾錢、送料拾錢

細田 源吉氏著  
■創作集 末亡人  
價壹圓五拾錢、送料八錢

谷崎 潤一郎氏著  
■創作集 近代情痴集  
價壹圓貳拾錢、送料拾錢

三七七 二一八

常に何人かを愛せざれば己まぬといふ男を主人公とし、其の多彩は戀史を骨子とし、或は花柳界の内幕を描いて現代生活の縮圖を展べたもの、實に千數百枚の大傑作。

美にして賢なる令嬢が、境遇の激變から第四の階級に眼ざめて身を生活苦の煉獄に投ずるの経路を描ける長篇である。附録とし、絶世の稀才の傑作『空華』を収めた。

全篇一千六百枚の大傑作、著者三年間洗滌苦の青年を主人公とし、眼ざめた若き女性、主義者、藝術家の群を配し、現代生活の苦悶と悲劇とを描ける稀有の雄篇大作である。

近代思想の洗滌を受けた一叛逆者を主人公とし、その熱烈の戀物語を中心として戦後の不安の光を歐洲の現状を寫したる戦後、作者の光輝ある筆は、現代文明の變遷、劇面を描寫して遺憾なしと稱せられる。

多感熱情の三青年を主人公としてわが日本の動搖混亂せる思想と生活とを展開せる大傑作、哀婉の戀あり強烈の愛あり、その背景をなす廢屑の凄惨なる活圖等あり、東京を象徴となす現代日本の全景を窺はしめる。

芥川氏近業十六篇の集。「一塊の土」の重厚なる寫實「糸女覺え書」の深刻なる解剖「不思議な島」の輕妙なる諷刺。切支丹物の「北を」を示せる「おしの」追憶文學の典型たる「少年」を始め、悉く金玉の作のみである。

伐られても、咲く桃の花に人間不撓の力を寓して震後復興の劇壇に喝采された「桃源にて」を始め、作者身邊の戀愛問題をばしめる「張男の最後の日」以下「一日の素盞鳴尊」等の戯曲八篇及び小品數篇を収めた。

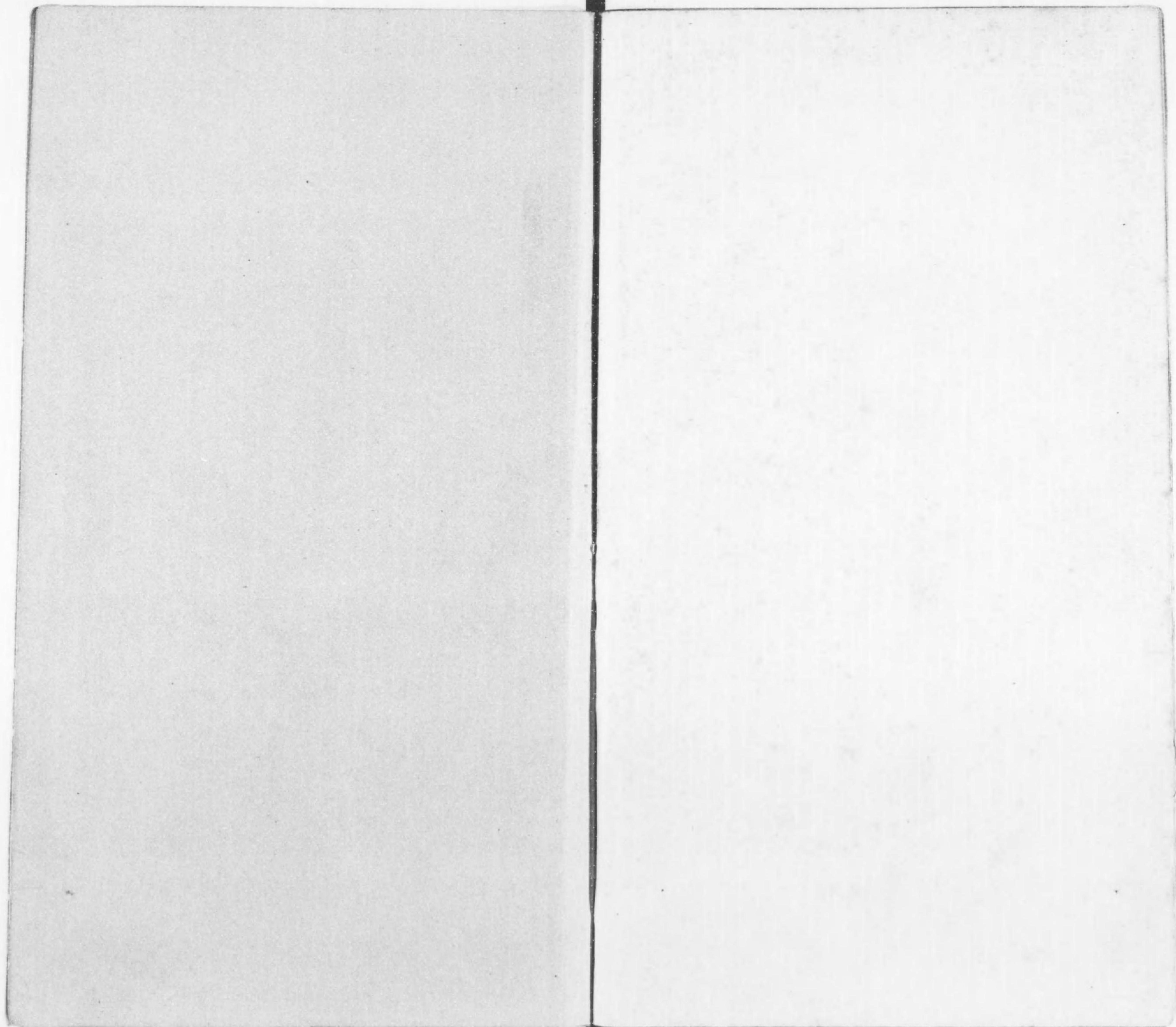
ふと街頭に見たる一人の美しき少女を中心「美人」を始め、一種の牧歌的情趣を包める好短篇「一夜の宿」の外「卓上にあつたもの」五分間「復讐」等の名篇に満ちてゐる。

心肉共に爛然せる美しい未亡人が性の誘惑に身を誤るの経路を描いて、艶麗且つ纖細、名浮世師の筆を偲ぼしめる「未亡人」。妖婦相抱くが如き深刻の戀愛を描ける「中年」等

肉に眼ざめた少年が一妖婦の美の魅惑に達つて、喜んで其の毒手に陶酔の死を死ぬる少年悲劇「戀を知る頃」艶麗の美女に好色の老爺を配して、戀態性慾の極致を示せる「富美子の足」をはじめ、著者獨得の名篇の集。

志賀直哉	久米正雄	武者小路實篤	菊地寛	芥川龍之介	島崎藤村	吉田絃二郎	藤森成吉	加能作次郎	江馬修	生田春月	吉屋信子
暗夜行路	破船 <small>(全二冊)</small>	彼の結婚と其後	眞珠夫人	傀儡師	家無	無	若き日の悩み	小夜子	暗礁	相ひ寄る魂	地の果まで
祖父と母との不倫の關係に生を得た一青年の暗い運命。影を描いた作者の痛切な極めた失戀の自傳小説で一面深刻なる心理小説である	作者自身の結婚を材とせる清熱切の戀物語と其の後の生活の記録父の仇敵に嫁して其の純潔を許さず遂に悶死せしめし其の終始を描く	戯作三昧、地獄變以下十一篇。寶玉の光輝燦たる氣品高き名作の集	質と量と明治文壇第一の大作にして、恐らくは不朽に傳ふ可きもの	三人の兄弟の生活を材とし、人間愛の哀しみを抒へたる長篇小説	多感の青年と島乙女との戀を中心となし若き日の悩みを描ける名作	若く美しくしき文學志望の女性性が戀感に一步步々々墮落し行く徑路の誘惑に夫婦關係等の幾問題によつて起れる悲劇を描ける大長篇	全三卷。二千百枚の長篇小説。現下の新らしき日本の全局を描いた	興味極めて多く而も藝術味豊かな名作にして吉屋女史の出世作也	二五〇	二五八	二二〇

續位單 料送は左 價定は右







527  
40

終

